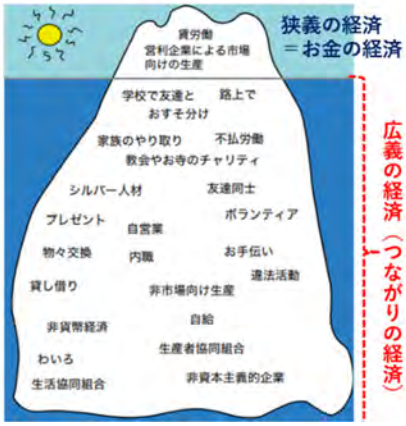
事業名：地域の生活・仕事創造から学ぶ地域つなぎプロジェクト

事業者：大分大学・教授・石井まこと　連携企業：株式会社コーネンコーポレーション　活動地域：佐伯市

1　事業の目的と概要：地方圏に入りこみ生活と仕事を知る

地方圏の課題として、人口減少が進み若者も少なく、交流が減少している。こうした状況を変えていくには、地方圏の自然、文化、産業を人的つながりで新しい仕事や生業（なりわい）を生み出す活動が求められる。そこで参加者である学生たちに、佐伯市内に出向き、自ら労働・生活をデザインしている人々へのインタビューを通じて、人口減少や地域経済の衰退といった地域課題の表層とは異なる生活・仕事のつながりの構造や力学（右図：広義の経済）を実感しもらう。実施に際して、佐伯市をフィールドに仕事を創りだす人をつなげているコーネンコーポレーション・浅利氏に協力してもらい、大学生が地域づくりをリアルに考えていく事業を実施した。手法としては、大分大学経済学部で展開しているアイデアソン授業を活用しプランだけでなく社会実装まで実施した。



出所：中澤高志（2020）「『多様な経済』への希望―地理学者は地域社会にどう貢献できるか？」『学術の動向』8月号

2　事業展開と効果

（1）事業の展開：佐伯市でのアイデアソンによる地域おこし事業

本事業の流れは下図の通り、①「キーノート」→②「インタビュー」→③「アイデア創出」→④「社会実装」とする。

まず事前準備として、①「キーノート」として住人目線でみた地域の課題と実践を紹介する準備講義を大学内で実施した。

次に、その上で住人かつ地域で生業（なりわい）を創造する事業者（プレイヤー）たちへの②「インタビュー」を企画した。「なぜ佐伯なのか」「なぜこの事業なのか」それぞれの事業者の思いに迫った質問を６つのグループで実施した。その上で地域の集会所でもある佐伯市船頭町「住吉御殿」を貸し切り１泊２日の③「アイデア創出」合宿（９月５・６日）を行った。ここで生まれたアイデアから学生が是非やってみたいと思う事業を④「社会実装」として、学生と地域の人が古着を通じてコミュニケーションをする「分け合いクローゼット」、市の文化施設「汲心亭」を使って地域の方を学生がおもてなしする「１日喫茶こころの○（わ）」の２事業を実施することにした。

（2）事業の効果：地域をリアルに把握する経験と地域への貢献

今回の成果は衰退していると言われる地域をリアルに学生たちが理解し、その発展可能性を理解できたことである。合宿研修で生まれたアイデアのうち２つは学生主体で地域の人と一緒に企画・運営・収益管理を行い、事業実践力をつけることができた。

また、今回の協力者である事業者たちにとっても、学生が現地に来て、一緒に事業に取組むことができることの意義を認識してもらえた。合宿中には懇親会も行い、語り合うことで、自分たちの事業や語りが教育に繋がっていることも実感してもらえ、地域の人々の自己肯定感を高めた事業にもなり、参加者すべてが成果を実感した事業になった。

事業の効果：地域をリアルに実感し、地域へ貢献（アンケート回答より）

1. 学生のリアルな地域体験：インタビューの効用
   「佐伯の人たちが、どのような町おこしをしているか分かった」
2. 成果を実感する取組：学生と地域が協力した交流事業の実施
   「地域で起こっている問題の根本を理解して解決策を出せた」
3. 地域で営みを興す人々の満足感：自己肯定感の向上
   「本当に有難いアイデアばかり、頑張らないといけないなと」